

KALS NEWSLETTER 56

2017年11月
九州アメリカ文学会
事務局 佐賀大学全学教育機構内
佐賀市本庄町1
〒840-8502

スコット・フィッツジェラルドの故郷を訪ねて—ミネソタ州セント・ポール—

高橋 美知子 (福岡大学)

午後の日射しにきらめくホワイトベア湖の水面を、小型のクルーザーが進んでいく。ミネソタ州セント・ポール郊外に位置するホワイトベア湖は、若き日のフィッツジェラルド夫妻がパーティー三昧のひと夏を過ごしたリゾート地であり、短編“Winter Dreams”の舞台、ブラックベア湖のモデルになった場所である。ミネソタ州セント・ポールの郊外にあるこの湖を私が訪れたのは、フィッツジェラルド協会国際大会の期間中のことだった。

スコットの出身地であるセント・ポールには、フィッツジェラルド・イン・セント・ポールというフィッツジェラルド愛好家団体があり、この団体がセッションの合間に様々なツアーを企画してくれていた。ホワイトベア湖では、数人ずつのグループに分かれて、地元の人々の自家用クルーザーに乗せてもらえる企画があったのだが、ギャッツビーの緑の灯にまつわる興味深い話を聞いたのは、そのクルーザー上でのことだった。

「ほら、あそこ。緑の光が見える？」と私の乗ったクルーザーのオーナーである女性が指さした先には、湖岸に立つ石造りの小さな建物（湖で泳ぐときに着替えるための建物らしい）の戸口に灯る小さな緑の光が、午後の強い日差しの中にかろうじて見えた。「見えた？じゃあ、反対側を見て」と言われて、同乗者一同振り向くと、対岸には真っ白なヨットクラブの建物が見える。「建て替わってはいるけど、1922年の夏、あのヨットクラブにはスコットとゼルダが住んでいたのよ」と弾むような口調で彼女が言葉をついだ。「そしてね、あの緑の灯がついている建物は、それよりずっと前からあそこにある。私たち夫婦はずっとここに住んでいるけど、ほんの数日前に気づいたの。ここが、ギャッツビーの緑の灯のモデルになったかもしれないって」…ヨットクラブからの退去を命じられるほどの騒乱の日々の中、パーティーとパーティーの間のわずかなひと時に、スコットは対岸の緑の灯に何を見ていたのだろうか。

ホワイトベア湖からの帰りには、湖から少し離れて建つ、禁酒法の時代の^{スビークイージー}もぐり酒場が

残る家に立ち寄った。玄関ホールわきの隠しドアを開けると、地下への細い階段が現れる。そこを下っていくと、低い天井、薄暗い照明、バーカウンターと、秘密めいた雰囲気たっぷりの空間が現れた。洗面所のキャビネットに見える扉を開けると、土を掘りぬいた地上への抜け道。もしかしたら、フィッツジェラルドもここを訪れたかもしれない…と思いながら地上に戻ると、家の居間には、『ギャッツビー』が近々刊行されることを友人に知らせるフィッツジェラルド直筆の手紙が飾られていた。そこから車で少し走った場所には、フィッツジェラルドの友人、コールマン家の別荘が当時の外観のまま残っており、家の横にはフィッツジェラルドの写真の背景として見覚えがあるレンガ敷きの小道。ホワイトベア湖周辺には、フィッツジェラルドと 20 年代の面影が、そこここに残っていた。

フィッツジェラルドが少年時代を過ごし、大戦後、*This Side of Paradise* を仕上げるために舞い戻った住宅街、サミット・ヒルのツアーにも参加した。市街地を見下ろす丘の上に立つセント・ポール大聖堂周辺に立ち並ぶ家々の外観は、ほぼ当時のままで、大聖堂のすぐ横にある鉄道王ジェイムズ・ヒル邸の壮大さは別格としても、エリアー帯が当時的高级住宅地の雰囲気を保っていた。州内のフィッツジェラルドゆかりの場所を、美しい写真とともに解説した *F. Scott Fitzgerald in Minnesota* の著者自らがツアーのガイドを務めてくれるという幸運にも恵まれ、フィッツジェラルド周辺のエピソードを数多く聞くことができた。

ホテルに戻ってから、手元のローカル雑誌をめくっていて驚いたことがあった。昔も今も変わらず美しい住宅街と思われたサミット・ヒル一帯は、第二次世界大戦後、多くの家の内部が低所得者向けのアパートに改装され、1960 年代にはスラム街化していたというのだ。60 年代終わりに市が都市計画の一環としてその家々を買い取り始め、さらに数組の若い世帯が、価格が下落しきっていたかつての豪邸を購入して改装に着手し、長い年月を経て今の状態を取り戻したのだという。今の落ち着いたたたずまいからは想像できないことだった。

フィッツジェラルド協会の国際大会は、フィッツジェラルド夫妻ゆかりの土地で二年に一度開催される。協会は、アカデミックな世界に閉じないことを是としており、大学所属の研究者以外に、ライフワークとしてフィッツジェラルド研究に取り組んでいるという参加者も多かった。(私のような野次馬？もいくらかはいた。) その中に、スコットとゼルダの孫であるサム・ラナハン氏の姿もあった。自身のルーツに関する研究を続けているラナハン氏の今回の発表は、ゼルダの父であるセイヤー判事(つまり、ラナハン氏の曾祖父)の人物像についてで、当時の裁判記録や新聞報道の綿密な調査の結果、アラバマ州最高裁判事であったアンソニー・セイヤーは、厳格な白人至上主義者かつ分離主義者と結論付けられる、という報告だった。その他のセッションも、テキスト研究や伝記研究から、Amazon プライムで公開中のドラマ *Z* と *The Last Tycoon* の制作に関するパネル(残念なことに、どちらも第一シーズンで打ち切りになることがその後発表された)、ケンブリッジ大学から刊行されているフィッツジェラルド全集の今後の刊行予定まで多岐にわたり、私の初めてのセント・ポール滞在は、会場の内でも外でもフィッツジェラルド三昧の、貴重な一週間となった。

地区便り

<熊本地区>

熊本大学 池田志郎

熊本には山も海もありますので、農産物や海産物などが豊富なだけでなく、年間を通じて自然を楽しむこともできます。いわゆる「インスタ映え」する場所も結構あります。県内至る所にクマモンがいます。小泉八雲、夏目漱石、三島由紀夫だけでなく、現代小説や漫画などにも多くの題材を提供しています。日々の生活の中で新しい発見をする方法は文学研究と似ているのではないのでしょうか。

さて、前回以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をご報告いたします。

○138回（2017年9月30日）熊本大学にて

題 目： Toni Morrison の *God Help the Child* における母娘関係と娘の成長

発表者： 楠元 実子 （熊本高等専門学校）

司会者： 池田 志郎 （熊本大学）

- * プリンストン大学での夏の研究成果も加味した発表で、刺激的なものでした。もともとのタイトルに言及しながらの出版時のタイトルの意味についての考察、娘が成長することの意味、人種問題、児童虐待等の現代の問題などへの言及がなされ、壮大な作品世界が展開されました。参加者からも、献辞の意味や作品の最後の言葉の意味など様々な質問があり、暴力の解釈、愛着障害という現象、エンディングの明るい展望などについて、さらに詳しく説明がなされ、議論が深まりました。

○139回（2017年10月28日）熊本大学にて

題 目： Huxley の “The Gioconda Smile” と *The Devils of Loudun* にみる嘘と謎を秘めた女性たち

発表者： 高津 亜吏（熊本大学非常勤講師）

司会者： 濱田 比呂美（熊本大学非常勤講師）

- * 今回はイギリス作家の作品でした。ミステリー仕立ての短編とノンフィクション歴史小説とされる長編を取り上げ、嘘と謎をキーワードとして、女性登場人物を分析する発表でした。登場人物の特徴や作者の視点、夏目漱石の「モナリサ」への言及などもあり、興味深いものでした。参加者からは、絵画「モナリザ」に関する質問、作者の女性観、当時の一般的な女性観、それぞれの女性登場人物についてのイメージ等について多くの質問が出て、活発な会となりました。

次回は12月2日（予定）で、研究会後は忘年会が予定されています。

<宮崎地区>

宮崎大学 井崎 浩

普段報告することのない宮崎地区ですが、今回は文学に関連する特別講演が開催されましたのでその報告を致します。実際原稿は、講演の招聘者であり、宮崎大学で英文学の教鞭を執っておられる新名桂子先生にお願いしました。アメリカ文学ではなく、カナダ人作家の作品を扱ったものですが非常に興味深いご講演でした。詳しくはご一読下さい。

講演題目： 飛び散る女の体——『イギリス人の患者』*の映画と文学

* *The English Patient*

講師： 今泉容子（筑波大学教授）

日時： 2017年7月7日（金）13:00—14:30

場所： 宮崎大学教育学部

今泉容子先生（筑波大学教授）を招聘して、カナダ人作家マイケル・オンダーチェのブッカー賞受賞作品『イギリス人の患者』の映画と文学を、女性の体に注目することで比較するという刺激的な講演を行っていただきました。文学とその映画化作品とでは、メディアが違う以上、全く違う表象が行われてしまうことはある意味では当然なのですが、それらを比較してみると、大変興味深いことが分かってきます。映画の冒頭で、主人公の男性が、昔の恋人の体を抱きかかえて運ぶのですが、その恋人は生きているようにも見えます。ところが、小説の方では、死後数年がたっているということで、白骨死体を抱きかかえているということになっています。このように書くと、小説がグロテスクに感じられるかもしれませんが、実は、この白骨死体の空中に飛び散る様が、大変詩的な表現で語られており、素晴らしいのです。そして、なぜ映画では小説の通りに描かれていないのかという点に関して、極めて興味深い質疑応答がなされ、講演は成功裏に終わりました。

映画にも文学にもそれぞれの持ち味がありますが、文学の映画化作品については、やはり、映画をみただけで文学を読んだ気持ちになってはいけないと思われれます。授業で、文学紹介の方法として映画を使うこともあるのですが、その功罪を見極めて使う必要があります。文学の紹介を安易に映画に頼ることは慎むべきですが、今回の講演を拝聴し、学生に映画と文学を比較させて如何に違っているのかを分析させるのは、その違いを認識させるという教育的観点からもひとつの良い方法ではないかと考えました。（文責：新名桂子 宮崎大学准教授）

<鹿児島地区>

鹿児島大学 千代田夏夫

さる10月14日（土）15日（日）鹿児島大学郡元キャンパスで開催された第56回日本アメリカ文学会全国大会は、九州支部の先生方のご尽力のもと、無事成功のうちに終了い

たしました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。前日の13日(金)には日本ウィリアム・フォークナー協会第20回全国大会が本学稲盛会館にて、また竹内勝徳先生(鹿児島大学)研究室、鹿児島大学グローバルセンターならびに同医歯学総合研究科人間環境学講座疫学予防医学の共催による「医療人文学」(Medical Humanities)シンポジウムも鹿児島大学法文学部にて開催されました。後者では大会ワークショップにもご登壇くださいましたジェーン・スレイキル先生(ノース・キャロライナ大学チャペル・ヒル校)の基調講演について竹内勝徳先生(鹿児島大学)生田和也先生(鹿児島女子短期大学)はじめ御五方によるディスカッションも行われ、新しい知へのアプローチが鮮やかに示されました。

以下寄せられました鹿児島地区会員の動静をお伝えいたします。千葉義也先生(鹿児島大学名誉教授)は今年も『ヘミングウェイ研究』第18号(日本ヘミングウェイ協会、2017)に「書誌 日本におけるヘミングウェイ研究—2016—」を寄稿されました。森孝晴先生(鹿児島国際大学)は、6月7日に京都で開催された日本ジャック・ロンドン協会年次大会にて、会長挨拶や25回大会記念のシンポジウムの司会などのお仕事を無事に果たされました。ロンドンに影響を与えた薩摩武士についてのご論文のシリーズは、第3部の「羽島へ、そしてアバディーンまで—長沢鼎の世界旅が始まる」が『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第18巻第2号にすでに掲載され、第4部の「長沢鼎、アメリカに生きる—ニューヨーク州からカリフォルニア州へ」は同論集の第18巻第3号に掲載のご予定です。千代田に関しては『ポー研究』第9号(日本ポー学会、2017)に「ポーとフィッツジェラルド—美女をめぐる屹立と倒壊—」が掲載されました。ご高覧賜れましたら幸いです。

<沖縄地区>

琉球大学 喜納育江

沖縄地区からは、加瀬保子さん(琉球大学)、名嘉山リサさん(沖縄工業高等専門学校)と喜納の研究活動についてご報告します。昨年の秋冬号でも少しだけ言及しましたが、まず2017年上半期には、加瀬保子さんが、今年1月にフィラデルフィアで開催されたMLAの年次大会で「アジア太平洋戦争」と記憶に関するパネルのオーガナイザーを務め、ご自身も“The Perfect Guest: Trauma, Kinship, and the Implicated Subject in A Gesture Life by Chan-rae Lee”のタイトルで発表されました。加瀬さんはさらに今年4月にもポータランドで開催された Association for Asian American Studies (AAAS) の年次大会で“Politics of Care and Racialized Medicine in A Gesture Life by Chan-rae Lee”と題した発表をしました。日本とアメリカの学会の間に距離を感じさせない活発なご活躍ぶり、同僚のみならず学生たちにも大いなる刺激を与えてくれています。喜納は、3月にミシガン大学で行われた Radical Transnational Feminisms Research Seminar に参加しました。ミシガン大学の The Institute for Research on Women and Gender が主宰し、マサチューセッツ大学の Laura Briggs がオーガナイザーを務める同セミナーに、Robyn Spencer, Karen Leong, Maile Arvin など、アメリカのフェミニスト研究の前線で活躍する9名の女

性研究者たちと共になぜか私も招聘されました。4日間の研究会では、高度な学術的議論にひたすら圧倒されるばかりでしたが、そんな疲労感さえも心地よく感じられた経験でした。9月には、九州大学の小谷耕二先生が代表の科研プロジェクトの調査でカリフォルニアの Karen Tei Yamashita 氏を訪ね、マンザナー日系人収容所を氏と共に訪れる貴重な機会を得ました。また、10月末には金沢大学の結城正美先生がオーガナイザーを務める中部英文学会のシンポジウム『『人新世 (Anthropocene)』への文学的応答』に招待され、Leslie Marmon Silko の作品を論じる研究発表をしました。喜納自身が代表を務める「アメリカのグローバリズムと島嶼地域」に関する科研プロジェクトでも、グアムやプエルトリコから研究者を招聘する研究会を開催しました。最後になりましたが、名嘉山リサさんが、4月にジョージ・ワシントン大学での1年の在外研修から帰国しました。米国公文書館で、米国統治下の戦後沖縄で USCAR (米国民政府) が制作した沖縄に関するテレビ番組やドキュメンタリーの映像の調査に多忙な毎日だったようです。帰国後、6月には映画研究の同僚たちと「沖縄映画研究会」を発足し、その事務局長を務めていらっしゃいます。9月に開催された同研究会の第1回目の研究発表会では、「ハリウッド発沖縄ロケ映画『戦場よ永遠に』」と題した研究発表を行いました。サイパン戦で多くの日本兵・日本人を救った米海兵隊員の実話にもとづいた映画『戦場よ永遠に』(フィル・カールソン監督、1960年)が、米軍統治下の沖縄でどのようにロケを実施したかについて、ワシントンで収集した一次資料をもとに発表されました。沖縄とアメリカを切り結ぶこうした稀有な映画研究を、名嘉山さんがこれからどのように発展させていくか、沖縄にいるアメリカ文学・文化研究者も期待しながら注目しているところです。

事務局からのお知らせ

(1) 九州アメリカ文学賞応募

『九州アメリカ文学』58号にありますように、九州アメリカ文学賞（新人賞）の応募締め切りは2018年2月20日（火）です。応募をお待ちしています。

従来は郵便による応募に限定していましたが、先年より電子メールによる応募も可能となりました。

(i) 郵送の場合

〒840 - 8502 佐賀市本庄町1 佐賀大学全学教育機構内
九州アメリカ文学会事務局 鈴木繁 宛

(ii) 電子メールの場合

高橋美知子（福岡大学）mtakaha@fukuoka-u.ac.jp

いずれの場合も、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。

(2) 『九州アメリカ文学』投稿

『九州アメリカ文学』58号にありますように、『九州アメリカ文学』への投稿は2018年4月30日（月）締め切りです。こちらも応募をお待ちしています。

宛先は

〒840 - 8502 佐賀市本庄町1 佐賀大学全学教育機構内
九州アメリカ文学会事務局 鈴木繁 宛

(3) 「九州アメリカ文学会出版助成金」申請

2018年度「九州アメリカ文学会出版助成金」への申請締め切りは、2018年2月20日（火）です。申請の要領は、『九州アメリカ文学』58号を参照下さい。

(4) 九州アメリカ文学会第64回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第64回大会は、2018年5月12日（土）・13日（日）の両日、北九州市立大学において開催されます。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。多くの研究者の積極的なご参加をお願いいたします。

1. 発表者は大学院博士前期課程（修士課程）在学者を含むアメリカ文学研究者。
2. 発表時間は40分（発表30分、質疑応答10分）。
3. 発表は英語でも日本語でも可。
4. 発表希望者はタイトルとレジュメを以下の要領で提出すること。
 - * レジュメは発表の際に使用する言語で作成すること。
 - * 英文の場合は300語程度。
 - * 日本文の場合800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。
 - * 発表題目の固有名詞（作家名・作品名）は英語とする。

- * コンピューターで作成する場合は、Wordを使用し、メールで添付書類として送付するか、ワープロソフト名が明記されたフロッピーディスクに原稿を添えて郵送すること。
- * 提出先 メール tsutomu@flc.kyushu-u.ac.jp
郵送先 〒811-1123 福岡市早良区内野7-11-6 高橋 勤
- * 締め切りは2018年2月20日（火）（必着）。
- * 大会ならびに発表に関するお問い合わせは、高橋 勤（tel. 092-803-2217 / e-mail: tsutomu@flc.kyushu-u.ac.jp）までお願いします。実りある大会にするために、多くの応募を期待いたします。

(5) 『アメリカ文学研究』, *The Journal of the American Literature Society of Japan* 論文投稿

日本アメリカ文学会発行の『アメリカ文学研究』（和文、英文）への論文投稿希望の方は、直接、本部事務局へ論文を送付してください。原稿送付先住所、締め切り等、詳細は必ず本部のホームページにてご確認ください。

(6) 日本アメリカ文学会第 57 回全国大会発表者募集

2018年10月開催の日本アメリカ文学会第57回全国大会（10月6日（土）・7日（日）、実践女子大学）で発表を希望される方は、名前、住所、略歴、現在の所属、発表のレジюмеを九州アメリカ文学会事務局のメールアドレス（suzukis@cc.saga-u.ac.jp）に3月31日（土）までに電子メールで応募してください。

以下の点に特に気をつけてください。

- (i) 略歴では、連絡用のメールアドレス、6～7月にかけてゲラを送送する宛先の住所（郵便番号）、現在の所属（常勤か非常勤か）を必ず明記する。
- (ii) 発表タイトルに副題をつける場合は、和文は「—」、英文は「:」に統一する。
- (iii) 発表レジюмеの字数は日本語で1200字程度、英文で400語程度。

例年会員に送られる年賀状にその詳細が記載されるので、発表予定の方は必ず参照する。

(7) 会計からのお知らせ

大学等の所属に変更がございましたら、年会費振込用紙にその旨をお書きいただくか、あるいは、KALS 会計(名本達也：namotot@cc.saga-u.ac.jp)までメールにてお知らせください。どうぞよろしく願いいたします。

以上

重要です。必ずお読みください。

●KALS 会員用メーリングリストへのご登録のお願い●

前年来、下條恵子先生のご尽力によりまして、メーリングリスト(以下 ML)への会員登録を進めてまいりましたが、今年5月からシステムの管理を事務局が引き継ぐことになりました。このMLを、ニューズレターの配信、大会案内、例会案内、災害や列車運休などによる大会・例会の急な変更、また各種学会・文学イベントのお知らせなどに活用したいと考えております。

この5月に開催された九州アメリカ文学会総会において、2018年度より上記の案内等はすべて、MLを使って行うことが承認されました。従って、これまで郵送されていたニューズレター、大会や例会案内等が、MLにご登録いただきませんと、来年度以降、皆様のお手元まで届かなくなります。なお9月末時点で、登録者数は40名程度に留まっております。この機会に是非ご登録いただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【登録に関する詳細】

MLへの参加方法：管理者の承認が必要。

ML投稿設定：登録メンバーのみ投稿可、それ以外の投稿は管理者の承認が必要。

【登録の手順】簡単です！ぜひご登録をお願いいたします！

1. 以下のメールアドレスに空メールをお送り下さい。送信時のメールアドレスがMLに登録されます。
join-kalsjapan1955.dIPx@ml.freeml.com
2. 【Freeml】より「ML参加確認のお知らせ」というメールが届きますので、メール内のリンク先（「参加完了はこちらから」）にアクセスし、メッセージ欄にお名前とご所属を記入の上、「参加承認申請する」のボタンをクリックして下さい。
3. 一週間以内にML管理者(KALS事務局)による承認が行われ、その旨メールが届きます。このメールが届くと登録完了です。一週間以内に承認のメールが届かない場合はお手数ですが、事務局の名本先生までご連絡下さい。
(namotot@cc.saga-u.ac.jp)
4. 登録された方はMLのアドレス宛 (kalsjapan1955@freeml.com) にメールを投稿することができます。投稿されたメールはMLに登録されている会員の皆さんに送信されます。

(以上、登録方法を解説した文書は、下條先生がご作成くださったものです)